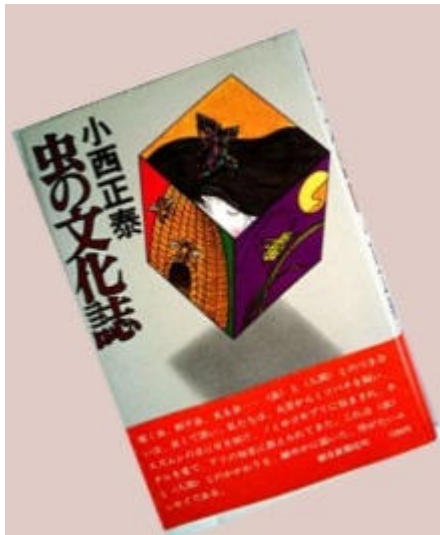


一洋行した昆虫標本一

(記・写真 岡本)

NHKの大河ドラマ「晴天を衝け」は渋沢栄一を主人公にした幕末から明治以降にわたる、我が国近代化の曙光の時代を描いたものだ。先日観た場面は、渋沢が第4回パリ万博に派遣された幕府代表団に同行してパリに赴き、西洋の文物を観て驚愕している模様を描いていた。この頃、偶々読んでいたある本で、パリ万博に日本から昆虫標本が出品されていたことを知った。

仏国は1865年3月諸外国に対し1867年5月開催予定の万博への参加を正式に要請した。幕府は決定に手間取り漸く同年9月に参加の決定をフランスに伝えた。時局は、長州を中心とする倒幕の気運は高まり、薩摩と英国との関係が深まりつつある。幕府は横須賀製鉄所計画や軍制改革絡みで仏国との関係強化中であつた中で参加を決定した。我が国はアジアで唯一の正式参加国であつた。我が国からの出品物で「和紙、絹製品、漆器」が評価されてグランプリを受賞した。また、北斎らの浮世絵、高橋由一らの油絵などの美術作品も出品され、欧州ジャポニズム(日本趣味)の契機になった。



ある本をとほ、「虫の文化誌」(小西正泰著、昭和52年12月朝日新聞社発行)である。その中の昆虫採集の項を読んでいて昆虫標本が正式にパリに洋行していたこと知って驚いた。幕府は仏国から一般の出品以外に昆虫標本の出品を求められたようだ。そこで幕府は、開成所(注1)の御用掛で博物学に造詣のある田中芳夫(注2)を1866年に「虫捕御用」に任じて、パリ万博出張と昆虫標本の製作を命じた。

田中は助手二人、お供三人の六人で江戸、常陸、上総、下総、武蔵、相模の関東一円や富士の裾野を1866年4月から8月にかけて採集旅行をした。採集には漁業用のさで網を使い、採集品は紙(三角紙)に包んで持ち帰り、56個の桐箱に絹の布を敷いて、その上に舶来の留針「スペルト」に刺して標本を作った。箱には樟脳を入れた。11月にパリに向け40日以上もの長旅に出発した。昆虫標本は、ナポレオン三世とパリ殖産協会からそれぞれ賞状と銀メダルを受賞した。昆虫学史上貴重なこの資料は、現地で仏人に買い取られた後、所在不明になっている。惜しいことである。

我が国の昆虫採集を概観してみる。我が国での昆虫採集の起源は、昆虫を食するため採集していた未開の採集生活の時代に始まるが、この習俗は世界各地で今も広く残っている。教科書に載っていた法隆寺の国宝「玉虫厨子」にタマムシの前バネが使われており、その数2563匹分と推定されている。平安時代中期から鎌倉にかけて成立した「堤中納言物語」の中の「虫めづる姫君」には虫好きな女性が毛虫などを集めさせて飼ひ、観察して楽しんでいる話がある。



時代は飛んで、世相が安定した江戸時代になると俄然昆虫が人気を獲得し始める。虫を採集しても保存が難しいので、当初は絵に描きとって「虫譜」を作った。庶民ではなく本職の画師、大名、武士、本草家などである。画師は絵の習作を兼ねて描いたのかもしれない。画師では円山応挙、大名の熊本藩主細川何某は殿様芸を超えていたという。江

戸後期になると、虫に針を刺す洋式の製作方法が既に一部本草家に知られていた。恐らくシーボルトから教わったのだろうという。明治維新になると標本技術の進歩と普及は著しく、横浜には在留外国人や船員を顧客とした蝶の標本屋が三軒もあって、琉球方面まで商品の採集にいったという。

日本人と昆虫を扱うからには、光る虫ホタルと鳴く虫に簡単に触れておく。平安時代の貴人達もホタルを初夏の風物詩として眺めたり、江戸時代にはホタルの名所には多くの人々が出かけた。名所には「ホタル船」が出て、飲食しつつ遊んだという。万葉集には飽かずにコオロギ(鳴く虫をコオロギと総称した)の音を聞いたというようなコオロギを歌った句が七首あると言う。江戸時代には鳴く虫を楽しむ習俗が流行り、虫売りが現れた。人工飼育したカンタン、マツムシ、クツワムシなどの虫売りの組合「江戸虫講」があった。鳴く虫を捕らえて好みの場所に放って声を楽しむ「虫放ち」や虫の名所を訪ねて声を聴き分けあった「虫聞き」という風流な遊びもあった。今はなくなってしまった当時の鳴く虫の名所は、隅田川東岸、王子、道灌山、お茶の水、広尾の原、関口、根岸、浅草田圃などであった。



小学生の頃、昆虫取りに夢中になった時期があった。セミ、バッタ、トンボなどを裁縫の待ち針で背中を刺して紙箱に貼り付けていた。捕まえた虫を磔刑にして眺めては、変色、腐ってくると放る。その繰り返しだったようだ。本格的な標本作りをしようというところまでは進まなかった。

(了)

- 注1) 開成所 文久3年(1863年)に設けられた江戸幕府の洋学教育研究機関、開成所規則には教科目を蘭、英、仏、独、露の外国語、天文、地理、窮理、数学、物産、化学、器械、画学、活字の諸科目としている。後の東京大学の前身
- 注2) 田中芳男 天保9年(1838年)信濃国伊那郡飯田の産、物産学と博物学を研究、1866年開成所「虫捕御用」を命じられ、昆虫標本を第4回パリ万博に出品、1890年貴族院勅選議員、1915年男爵、1916年没